

大欠

俳風
柳多留
四十二編

~9
1147
41



欠

41

門	へ	9
冊	1147	
卷	41	



柳橋四十二編

古本のかきやまが
 遠枝を於門の柳が
 評を冊の入り口へ
 ありのさやぐんせを
 一採の図りありとも
 戊辰移

秋角

大とくか事加ふとのふと巻ノ
 仏立世馬くびりくの所味方
 新父の予く所里ハ安堵びり
 念力のふるも山系く巻と巻イ
 粒をの禿一巻もかこゆぐり
 大のまゝ巻とんと境の遠ふもこ
 こかろうるもこまいわり 松
 訓床の世界ハ知らぬ令屏風
 ちげびり移と彼と花さき
 紀多

梅屋テ

燈ハも通らぬ是く代とふま
 巻心も谷法新も谷く巻も
 庵の寺和の巻人ハ一旦於
 人情の欠ナとり河めく母ハつぎ
 笑らひく巻ハ根の強る祐天古
 放生舎まより 徹よ六千巻も女
 清くぬ巻悲巻松と巻も
 年巻く夜の父ハつくくびり
 古海くのわくく巻も巻も巻も
 巻糸
 木笑
 嘆多
 井植
 カテウ
 竹子
 王川
 志夕
 三枝

欠

星の軌消く月更ハ言ハザリ
 畢九ウリハレト法テぬ所星目
 日
 呉抜至と陳至判五大遠ハ
 嘯子
 負く播くハ海以の暮どん信
 而且
 井の夢父世道と影ハ南テ
 巳梅
 何コ分テ世ハ下女中
 一イタ
 王孫の例今浪乃所寺ザリ
 夏中
 性ハ益之科科と出ハ
 風櫃
 良米と身ハつき道ハ赤老
 亦亦

世子三

備りよととらハレト伝ハカザリ
 山柳
 花くまハ千日草ハ坊とザリ
 柳多
 大正の里く種子花と音ま
 志丸
 残ハ小判と石碑の影ハ
 眉也
 上下ハ指ハ長走ハ音り
 八重
 女房ハ半口ハ音ハ
 五友
 善解と音ハ音ハ胸ハ
 糸石
 新報のくハ楠元ハ音ハ
 不ノ

社神の産福御事其つくり
 か甘の汐干使合増とくり
 けふの湯物法くは玉土産
 九りのま子月又の味増と甘
 幸にハ秋ナ色く青なる門
 空年の月と雲魚のあつと枝
 細くを御く如房はつまふ
 魂くいと成仏きる亦をゆ
 悟ひふまのの地名きりいし
 カサウ
 山杉
 木葉
 亦乐
 未乃
 綿多
 赤糸
 綿多
 懐古

懐古

六月ハも日神乃内表ひま
 は巻の巻も又仕さいと先ナ乃夏
 名山ハ巻る念仏杖一ナ
 口くも遠く集りてる山
 魚多る多る風雅のま向へ
 祝イハ千年仏がんの中は知
 如方江ノ流津流おもし習ひ
 坊と持河下らハ河守り大さる
 寒あつるともくもり以
 糸乃
 羊麦
 志夕
 柳多
 カテウ
 三枝
 か石
 糸乃
 亦乐

六まゝしりきまゝしりきまゝしりき
 ち後ハぬり味香知高斗り出
 ちふらういからいり事と猫と張
 粒をの禿一十中もかといや
 十徳をばと茶臼と押ハヤ
 城とまゝハハんや蔵おいておや
 大会のふハ月とくんとえハ
 いう粟と麴ハふくけきと上ケ
 一トぬハふか珠教を乃志あげく

鬼柳 此内 木罌 スノ 善美 一イタ 丸逸 瑞子 竹子

梅里二七

梅中き珠教をハ安記ハ派メ
 九ツ雲子月又小まををハけ
 きんくハ月又星まきく清とま
 奈とくハ今ハ甲良ハ似とく堀
 人数とく羅ハ丸綿ハ表とく
 島泊りま舟ハ名根ハ里ハと
 多ハ美程夜入ハハ五十年
 かき人の為ハヤハハのハハ
 焚付ハ茶釜の脈と川とえハ

志夕 亦乐 东夷 矢正 可笑 五友 古寺 市东 夏奴

ちんねらいびやれりしつゝの途ひし
 上下と持ッハあしかふらるゝかぶ
 中込切赤じい小ききりりきり
 アイハあけけづらきりり
 ちんね下女と保の谷と山終
 中ふ巻とげんりりりりりりりり
 どんかきりりりりりりりりりり
 井ノ塚ハ上り赤根ヤハ下りりり
 川うけの終保十月二百りりり

赤松
 五友
 鬼柳
 杯舟
 竹子
 カサウ
 千房
 矢正

柳葉テハ

かつろげふまをけりりりりりりりり
 風風とてりりりりりりりりりり
 ちんね下女茶せんを利こりりり
 新号をうりりりりりりりりりり
 赤下ふむりりりりりりりりりり
 桐の本と下秋屋ふりりりりりり
 櫻しいと成仏さるりりりりりりり
 若海や下と馬りりりりりりりりり
 まりりりりりりりりりりりりりり

若後
 スノ
 三枝
 竹子
 糸乃
 木を
 綿子
 松山
 同

おきくかど亂世且形小あき世の
 神略の清子小様くのたつ咳
 子や是と山形小もあえ口詩
 あきく松屋つきま乃迄あへ
 羊畑親子川もふてへたひ
 念仏小力と入しく湯小沈
 ともやの入解羊つひま仕出
 割り物ふり水物ももるまき子等
 おくの宛終あつてあむく

可矣
 夜後
 雨夕
 志
 集
 比内
 市
 シ
 夏奴

海軍六九

新造のお入祥にお客斗りしり
 帆柱のてしちんおひり 残念さ
 糸まゝ 悴けんごお出た
 張形もあきまひくあき後
 赤貝、吹くくくふ五月橋

川柳評

新氏と小六万べんの淋味方
 海軍かまき小余らきまの魚
 赤多居くまきも極の杖と化し

為人
 甲
 木
 柳
 五
 赤
 赤
 赤
 赤

活暮状かこもかこも厚い様
 志しきがー一ツと精も日
 大法事する處士や儀方あり出る
 采の候お持来ふ不ろ起し
 後心も谷法所も谷くまら
 子のかけの雲思を涙く青おけ
 念仏を信ふ事とて人
 所法くく花ちる里へ大一生
 死全といくくてまふ世思道
 古多 山花 古多 木更 井坊 志多

哲三十一

燈ろくも哀の秋入別世界
 秋遠ちくけお所紋も八玉や物
 中此氣くくく之千坊さとき
 死くしきましと小松どの下人
 叙言くにとりきよをもて地
 神高を救く母がほろしめ
 所那争く慈悲百あけけ迫り
 かここを今かくて有る上君之
 碓りまのを死んばあんの仏之
 二丁 柳の 力多 玉川 东夷 伊庭 初柳 山柳

上をえくは思のまは智思位
 紙花と和あるちの神作位表
 手向も一花とくふぬ糸岳寺
 かき人の為うや今ハ六何と
 上下と持ハ何れか雲うじ
 念仏も大きな珠教くらんがしき
 天王寺の松ふきくまのまん
 証者の松ふきくまのまん
 十八とあへく想チらん化之

柳平ノ土
 松山

念仏をすくうりしを蓮
 抹魚をひけりぬをひけりて
 丹遊山名号かか街面相
 美後家をとくし和島伝とき
 ち後ハぬりこそ和島斗り生

玉手
 志夕
 玉手
 カテウ
 業虫
 志丸
 矢正
 志誠
 比内

乳のツツとぬと車とるいさる
 通辞のいとも重人の紅点物
 川のた四季の咲の江戸斗
 空や少とへつれと何一孝
 赤巻と二平のぬは小松うり
 井の山うりえちうしてくまうり
 うりうりも知れぬ秋葉井井徒
 うへ代和洋黄の色も石と門
 ハ橋のぬふりくも冬うり

山柳 一佳 西且 山花 雲山 門柳 共流 集書 古書

梅里三ノ十五

こんちるこりふねへぶあ老
 小水の雲小ききと内づうけ
 門表をぬりも夏のみ木と出
 菜島と心多外くゆめハ光
 来年と若ふもをるんハ十七
 うりうりさ島の女房う後ぶか減
 加賀紋をよと風流か後ぶとと
 ぶうぶとらふもお恋と保志月先
 橋上ハ橋と去うりもをうり

多あ ト犬 門柳 松山 山柳 川車 市丸 為人 西且

味嗜ふるもあつたまあふ小侍
 志夕
 志夕
 八重丸
 後友
 行子
 赤松
 木急
 五幸
 芋洗
 柳屋二ノ七

一人り老大きを於戸を一本きり
 三翁
 弓削の乃後糸内と市の雲
 三幸

柳雨評

紫昌さ月ハ四介一城とてりし
 山柳
 三枝
 三枝
 志丸
 綿多
 雨且

足袋のそとをちま流てきて判
 其月小早年中の教をこもせ
 千金の坊名ハ降ヤも休ぶ虎
 星下り納所のつかり細工之
 浅美端くぬの仕立を交易し
 馬木より横ぐーいやうくは道
 お小町包と進ハへ名をあげて
 おおりのあし千多松を宿とまへり
 ふきけんが退出まへるお御子
 竹子
 振袖
 柳子
 力子
 尾合
 亦楽
 山松
 松山
 木更
 柳子二十八

江戸の舌をすくへるくさざき
 歌えせの歌と見えぬハるの足
 ろくせんく虫と進出まへるきぬ
 五丁のてのり四季お歩掛免之
 松扇ハ片目おまへるおまへり
 申るの中カハ辰巳もに出され
 櫻の字乃門ハ未明の休迫
 進かけるやつを西庇の皮がやうげ
 ちつき千里ハ舟やう知らぬ
 共筆
 共筆
 若夫
 共流
 佐成
 一徳
 未系
 十丈
 共筆

な子多千多りつて目と道
 兄弟夫婦うげと女二王さる
 南田川是くらまゆくのきとふあ
 かしらの里への怖ハ近イ不
 〜〜〜とらたおれく居候
 〜〜〜とらたおれく居候ア
 ぢら〜と下ノ世を可兒ノ入水
 望〜橋〜と〜橋の志〜し
 之野〜まの歌を契物〜い

柳屋二十九

割あん〜んおハあ〜ゆ
 多居〜と〜と〜と格あ〜兼る
 三〜と〜と〜と〜と〜と小人島
 名他〜も〜と〜と〜と〜と〜と
 杉波〜と〜と〜と〜と〜と〜と
 白波〜と〜と〜と〜と〜と〜と
 心〜と〜と〜と〜と〜と〜と
 七〜と〜と〜と〜と〜と〜と
 二季の〜と〜と〜と〜と〜と

遊生
 羊洗
 亦乐
 松山
 碎外
 亦乐
 五丁
 綿多
 水石
 ヨコセ
 多風
 名橋
 ココセ
 其流
 其城
 カコ
 其城
 五友

せんくを止マシまつけれく
 下女ひしひお山の麓かき道
 森のよまきしむる置まいる下女
 こやげもあつぬお子を捨て置
 不そ尾な抄子刺せし斗り
 泳いしをさそそ置ふらふの礼
 赤すいしをさそそ置ふらふの礼
 坊の下の番のししとまま
 指舌くまのふさしるまの女
 井蛙
 下夕
 同
 井姓
 眉長
 伍丁
 矢正
 千吉
 風胤

廿二年

業名をせやうしるすハもぐり
 帳尻ふみ代に化り尾もえを以
 赤梨のあつこのあつとそそ
 まくつうつ六歌係か置らり
 あつとそそえぬ友佐のしり
 つつの娘ハつんきりきり
 小侍あつつかつとあひがま
 之外やうと大おは子かあま
 吸付くくはまきまがそそ
 村夕
 菱後
 水子
 カ子
 志ら
 門柳
 赤松
 志夕
 勇人

者さしの大いなるくらしい白
 ふさ木の中まがもくくやん
 進ちんくまの井と経がぶさ
 阿ラウ何中やくまの油お
 せんくのまばいふまかやてあ
 松玉の寄帳やして下女ハおぎ
 赤羊小君一人くわらん五人分
 ここやあくくまゆの二まがら
 出合茶やまそくひく日お

汁人
 山柳
 竹子
 蛇存
 可笑
 羞憤
 尾合
 二お
 十丈

舟屋一ノ廿一

めこをし下女回ひか白ひびり
 川物のつくとれあつ下つこ
 志夕
 矢正

狐声評

夜までもほき流しのほとびり
 蛤、原氏のやどるおしく井ゆ
 和くふかふく笑玉の遠いこも
 月一ツ笑玉、強ひ知事、の健
 井まあ、ちんまきのふの井い
 雲やもくたつ川と月も存

一徳
 了花
 蜀人
 カテウ
 西夕
 水存

あこがしつて待とよむむらぎのけ
目の糸くく大キくえるぬのけ
あくぢろふ次ハお針の幅をくき
不そ尾を扱子割之ーけりぬ
年舌ハ口先あゆんかか先
あまのいづくやふらういハ人あひ
法見紀夜新のよひるハけけ
あいな夜をちつうつるを乳母あ
掛合ハぬと伝をいちけて告
尾合

柳屋二ノ五

花娘の花のちんぬまら出すも
下ノ坂車り人ハ川ーくけりキ
魚へんハ夜のえまよく置え之
こつてホくハましう後ハひてあ
あちゆまハぬのあうけうまくお
子掛く旦那とまこく電の流
ぞんくめぞんハあんであをひき
おれ入の花ものいそぬ病が出
あけハあまをとつれハつけあう

糸虫
木京
亦乐
眉長
竹子
一イタ
若美
山雀
矢正

糸屋と出くさしむらさき
 川物のうらむれ身下つら
 きん玉をきんくつらむら
 井夜づらがりけり互の貝合
 油づらげい小ぢらむらむら
 夜半小若ひくくらん五人が
 そ人との大きを膝下一本持
 祢玉の呆状とあつ下女はぎ
 下女の尻土おののつらむら

夏後 矢正 如花 志夕 尾合 三島 夏後 現世

柳屋二一十五

市風評

春弱 湖春 山樵 矢正 里松 白梅

春弱 湖春 山樵 矢正 里松 白梅

名作の老い老いさびぬ業研ん
 なに八津のまはに角なほくよこ
 あてやうなまも(小松のこげうたち
 杜取のいづら老うかへ。志あり
 内位はたつる一むん志ありがん
 孝りな婦象男をせんどもを
 冥東の小路満玉の大あつま
 砂通サマ風をいよとどうれがり
 鮎は今夜解ハあんせなり

其流
 一箇
 芝流
 〃
 亦乐
 亦子
 吉吉
 一徳
 亦乐

抄置ノ世々

母んまも秋のいづ好笑をいし
 孝りの高こハ海をありませに
 於考さこ舟歌ハ此箱十二ま
 才あがりの部家(は)こむ月夜
 袖みるく舟へ志者の入れとしめ
 冥の志西連若の糸の江
 嵐雪う不へ舟ころびこみ
 多田海舟よ二役新丑希
 名のきい妻老ハ舟七らこく

秀貞
 亦子
 此因
 棟水
 斗丸
 様松
 青森
 春駒
 牛妻

名香もあつれハ出るよしの先
 上との白くそ角ハ下の若を傳
 せんてを志くよこれらこ酒
 三本の爪を結ある路かこ
 かつらんの方ふお計りあつて飛
 ちハなる子味方ハ梅てよみかり
 津おハ接つけますかこころま
 喜山ハるま引れる差えち
 毎かハハかしのそも種ねを折り

香堂
 可分
 矢云
 亦未
 亦未
 徐者
 カ高
 亦未
 其堂
 折子下書

奈高梅一をよけハ白あかり
 端をよけくのたハ形あかり
 朝今ハ赤面くぬく継の橋
 日本ハ手をあすな子歌をかま
 双方ハ十毎さゆなよ免志うと
 そつと泣ケかぶ子母あり隣あり
 町つづつ梅るとあつてすハな
 端あつてく着く舟ち追あし
 符をいさへく梨子を一つあり

不徒
 一色
 赤梅
 伊達
 此四
 山披
 山石
 竹麦
 可分

花をよみちの角をまわらふり
辰柳の枝へ彼の葉をうへ
緋籠の漸衣いまやまじり目か
白粉もじやくも目しをせく妻
乙女の襟の裏やつと帯をとま
物下駄よませぬをの緒ちりぬ
物たへよこは大人をなまら食なり

孤声評

春のまをくははな街ををぬ紙上

柳屋上ノ巻

柳雨

端香
汁人
志々
ヨコセ
八重花
後後
川大

ゆいぶえやうものたつこの昔
まんがまうは法玉の襟をやつとべれ
うんご子子かしへくまふ祝の風
あねは母の抱をかく懐かきまら
待女神不二の吉枝の巻をえり
日ぞへ手をあすなをちをかま
大名の中の雀ハ大あた子
一服くえ久屋へをあらうんべい
一服くは赤のいつたため巻

也雀
一色
斗九
柳雨
其流
任達
振袖
矢云
川車

佐々木をいれぬく今子産たつ
 新波津の寄は江角草はくよみ
 水光社ハ小六子孫ハ大縁
 杜若のつづふ老うまつへ志より
 半産の中へも江戸ハ日午
 今の世子りつても上田丈夫
 くらかちくあるのすそつつき
 柳屋子ハ織笠を志きまふ
 双すく十五の志はあふと

井端 中妻 古子 芋丸 井丁 一由 芥菜
 志丸 一徳 里梅
 折子二花

ちりぬる子をよかぬかど娘のれ
 帰るよいくのたか取系なり
 地花地あぶ名のつくはさと地
 五羽を引するをさす中かこ
 志の鹿柄のつくは志を
 柳にしみとり葉やアト仲の町
 尼ちハ女の茶のちりところ
 重ん酒酒々白イト巨如ける
 宗仁と権系梅の文斗ん

里梅 一徳 志丸 夷初 瓦合 三鈴 杯舟 志夕 集子

出る氣くことつけくきる風車
 重なりもきよい水う大るゆ
 芝居でい志のんく坊あん
 芝居の匠いもあぢあ
 うけあされつうえこ又を人
 米とつあまを三ツと割餅ヨ
 赤子なうつれていあまい志の坊
 白粉も呉後も因一村て賣
 赤月の重結い志のせくあ

押軍三批

良えせの鈴くあややく鹿えれ
 能くお経掃きまつきのえ坊は
 九むんやの坊の歌ハ白く足
 を代のカチまふも表がまげ
 月ハあとなうく産籠をかり
 律儀へ誂のやうなほくうり
 津あへ横つけすああうま
 死ゆくハ娘よこされと推こんい
 草木よもなうい葉をやる面白

行儀
 如石
 梅原
 針人
 碎師
 縁起
 カラス
 市井
 山石

借馬をらのび致さるるりつま
 もでなうら氣のきく回る人を
 一舟のひあやくて来るありがさ
 ろうそくをこそうにらめり後
 じんつくちやつよいあまねたし
 舟のハに角な定のむーなん
 あう斗りしあひあひくはイ親子ん
 百日むるねへかさんく長はけ
 ハッの舟よりあう湯るもあ子

柿正三十一

百麻をつる餅サミずをのこせ
 内玄冥小舟の区料かうハなり
 大丈夫区ををわくハたれらじ
 内張右のちやうちん入れ十八た
 ちやうちんく解つく印ハまぐさ
 帆柱をねじくわつる矢の川
 草深イ赤口のやうなるばう池
 かつけ町ハ草深イ赤コくは
 まんとうの舟けうつる下もさ

井塔 若松 水石 柳雨 舟光 海二 松山 海人 矢心

ふんごしを分りて讀み南宮
薩の介ありおせぬむさし坊

東殿
五友

川柳評

内藤上みよす重の名もろく
むん志やくをぬくふく笑う系
やせろの二粒ふかたまふヶ庄
か子も平いの子ハ来子しは後在
尼ちハサの茶のちるところ
十五日車のつらむを母々をり

門柳
衫着
云枝
杯舟
柳多

路中ハサさうしく牛をひま
糸舟の巻結ハ蓋子のせくある
深地をえ子ませたてとくを
海人の中子紋付キ一人り尼人
紹巴りやうまけつ々ね遠の張
右掌符のまがひひりりく来る
すの日も島子うそま母のま
四月ハ初子セツ目二月ちり
ろくをくをニイにらりて役者

カサハ
サ一
古多
サ一
青森
松山
矢云
三枝
押雨

備田川いけんの舟を流しぬ
七宿の舟より舟にきりきり
子路の舟の兄舟子居
虫テまきれい子教をすしくん
風呂浴へつむさるのちろさざり
無天ハ江戸人あまいあをあ
並こころのけまきりきつれ
妻をとくあると跡ち宿子つり
西坊も柳の下きく水をの
可舟 海東 赤木 赤木 村々 山柳 若松 夷約 三枝

新四三三

葉狩やもしぬく女貞志のなれす
町うつり梅やどあつり碑をよ
歸す母のすけをかくよむかま
髪をひらつらつとく人のあこま
あつりりりあつりのはい親子
在にいでやひんをりくくは尼
あつりりりり梅継ぐりのりおや
おつりんの美ふお計りあつりり
はえく握ちくをすり小万物や
赤木 山石 柳雨 伊達 矢山 可知 門柳 赤木 赤木

うら葉やの切あまむく番切
 年代の口なまきふまうまげ
 小なづりあまかあるまづは
 大こくをぬすまれ和蘭後
 宗名論る麻子の月土うちへ
 切らるる子島子まめいあいち
 一ト二ハハたうひとをせしか
 小まはもすりこ本ニすりこ
 ありとちいる記をうけつこ
 東条 折子 糸丸

折里の世

せんまあへんたいこやぶら
 鏡かすり抄子をちりやな
 事あくとはいよこじし
 こと草ハ大つぼ液とあ
 さらやびつがうき増大
 かこく日け後生も阿も
 おんじんあえなまふか
 めいやうよるのかるねと
 いでまのえせんといふま
 東条 門柳 草流 伊達 玉川 小春 謹括 市東

人貨を利あげまぢはむつじい
毛がまへくは月えをする居
まよハ地と油くのうさ
へお役者子ハ之階の首ウクセ
竹切り陸坊路はくびねん
おき組へ小紋組グけちをつけ
小紋たどくこんやぐ
おをけーおけるハまねなはた
親とをこちの着ウーツをま

市風 鎌 若松 赤木 山椒 柳雨 升元 春馬 山椒

柳三十一世

一しが後まきでういをせなあきれ
かくそこのまひり地をのくのなえん
こぶわいの門ちをろしいそこんぶ
へをひつくとおやぶうさんとうぼんけ
けし婦ハまつとやとまゆつと
あまたまうは馬聲おらんまよす

門柳 女友 杯舟 鱗 尾合 赤木

俳風柳栢四十二篇終

